

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：33925

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00465

研究課題名(和文)ホロコーストを中心とする戦争表現のリアリティに関するジャンル横断的比較研究

研究課題名(英文)Representation of Memory of the Holocaust and Other Atrocities: Notion of Reality, Comparative Analysis

研究代表者

加藤 有子(Kato, Ariko)

名古屋外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90583170

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文):本研究は第二次世界大戦の記憶の表象とその形成プロセスを、リアリティ概念の変容に注目しながら、ホロコーストを中心に、ジャンル横断的かつ比較的地域から検討するものである。1.ホロコーストのカラー写真の調査を進め、リアリティという観点から考察を進めた。2.メディアや技術の変化、冷戦終結からEU拡大の地政学の変遷のもと、日本におけるホロコーストと原爆の記憶の形成が連動していたことを明らかにした。3.ナチ支配下のユダヤ人を救った「正義の人」の自国史美化の歴史修正主義言説への利用を明らかにした。4.戦争の記憶の比較研究に向け、超領域的国際ネットワークを構築した。成果は日、英、ポーランド語で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ホロコーストのカラー写真については体系的研究がまだなく、国際的にも新しい。カラー写真のインパクトを考える本研究の成果は、今後の博物館展示や教育にも応用可能だ。ホロコースト言説の分析は、近年、世界的に顕著な歴史修正主義の傾向を批判的に議論するための基礎としても資する。日本の戦争の記憶やホロコースト受容を英語、ポーランド語で発表したことで、欧米における比較研究を促すとともに、平和的な共生に向けた相互理解の一助にもなる。アメリカ在外研究の成果の一つとして、イェール大学フォーチュンオフ・ホロコーストビデオ証言アーカイブのアジア初のアクセス拠点を名古屋に作り、日本・アジアのホロコースト研究に貢献した。

研究成果の概要(英文):This project aims to examine representations of memory of the Holocaust and other atrocities of the Second World War in art, literature, and exhibitions and memorials, focusing on how the notion of reality has changed in constructing memory. 1. I conducted research of Holocaust photos taken in color to outline the history of these photos and analyzed their impacts on contemporary viewers. 2. I demonstrated how the reception of the Holocaust in postwar Japan was entangled with memories of Hiroshima-Nagasaki and other atrocities in which Japan was involved. 3. I examined how nationalist revisionist discourses use the rescuers of Jews during the Holocaust to beautify their own countries' pasts. 4. I built an international network for the future comparative project on memory of war. I published these results in Japanese, English, and Polish.

研究分野：ポーランド文学

キーワード：第二次世界大戦 ポーランド文学 証言 ホロコースト カラー写真 ゲッター 記憶 原爆

## 1. 研究開始当初の背景

東欧の体制転換と EU の東方拡大を経たポーランドをはじめとするヨーロッパの国々では、1990 年代から 2000 年代にかけて、ホロコーストや戦前のユダヤ人との共生の歴史を社会的に記憶する動きが活発になる。ホロコーストを核とする記憶研究も欧米で盛んになり、ホロコーストを唯一の出来事として特権化することなく、他の歴史的出来事との比較の視野で捉える方向性が、「多方向的記憶」(Rothberg, *Multidirectional Memory*, 2009) という概念のもとに共有されつつある。しかし、現実には研究言語や専門地域・領域の制約があり、ホロコーストや原爆、カタストロフィの記憶研究は、言語、地域、ジャンル別の縦割りで行われてきた。

本研究は、2015-18 年度科研費・若手 (B) / 2016-19 年度国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化) の研究課題「ポーランドの文学、美術、公共空間におけるホロコーストの記憶のジャンル横断的研究」の発展的展開である。ポーランドにおけるホロコーストの記憶を超領域的視野から研究する過程で、ホロコーストの記憶と同時代のアジアにおける戦争の記憶、とりわけ広島・長崎への原爆投下の記憶に複数の共通性が浮かび上がってきた。

冷戦構造が崩れ、証言者となる体験者が世を去りつつあるなか、各国で自国の加害の側面も含めた過去の見直しや証言の収集プロジェクトが進むとともに、それに対するバックラッシュとしての歴史修正主義も、時に政治主導で顕在化するようになった。冷戦構造の崩れに伴う地政学的変化や修正主義の強化という背景のもと、戦争の記憶の形成を、受容者、表現者にとってのリアリティという点から考えることで、比較の視野を切り開き、20 世紀初頭の戦争の記憶を総体的に、相互に絡まり合ったものとして捉えなおすという着想を得た。

## 2. 研究の目的

本研究は芸術や公共空間における第二次世界大戦の記憶の現れとその形成プロセスを、ホロコーストを中心に、ジャンル横断的かつ比較的地域から検討する。冷戦期から EU 拡大後の現在までの共通の時間的スパンのもと、メディアや技術、戦後の地政学的条件の変遷のもとに、出来事の記憶を地域・言語を越えて、互いに連動するものとして総体的に捉えなおし、記憶形成プロセスの共通性を浮かび上がらせる。さらに、これまで看過されがちであった音や匂いなど非視覚的要素やカラー写真が記憶形成に果たす役割を明らかにすることも目指す。長期的には、ヨーロッパとアジアの戦争の記憶の比較研究に展開する予定であり、そのための基礎研究と国際的ネットワーク構築も兼ねている。戦後 70 年以上が経過し、体験者 = 証言者が不在となる時代に入る。学術的蓄積をないがしろにする歴史修正主義的言説や出来事の忘却が再び新しいかたちで現れつつあるなか、歴史学の成果に基づく記憶の継承のあり方を考える本研究は、それらに抗する社会的役割も兼ね備える。

## 3. 研究の方法

### (1) カラー写真の役割と流通の地域的・時代的偏差

第二次世界大戦中にカラー写真技術を実地に使用可能だった国はドイツとアメリカである。ホロコースト期にナチ・ドイツが撮影したカラー写真とアメリカ軍の撮影した原爆や占領期のカラー写真を欧米のアーカイヴで調査し、その流通と受容から、カラーイメージが戦争の記憶の生成、変容にいかに関わるかを検証する。さらに、ポストコロニアル理論、ジェンダー批評なども使いながら、枠外の撮影者 / 被写体の力関係等を分析する。

### (2) 非視覚的要素 (音や匂い) のリアリティ

視覚的なものを中心に研究されてきた戦争の集合的記憶を非視覚的要素も含めて再考するた

め、ホロコーストや戦時の出来事を描く文学や証言における音や匂いの描写に注目し、イメージに物質性を与える非視覚的要素のリアリティと記憶形成に対する機能を考察する。

### (3) 「ヒロシマ・アウシュヴィッツ」の連想体系

戦後の日本とソ連・東欧という異なる地政学的文脈において、「アウシュヴィッツ・ヒロシマ」という平和主義的標語が同時的かつ相補的に使われていた。ポーランド、日本、イスラエル、アメリカ、ドイツなど、関連国における両者をめぐる言説を調査、概観する。ホロコーストと原爆という二つの異なる出来事の記憶の形成プロセスを、相関的かつ総体的に捉え直す。

## 4. 研究成果

当初の研究期間のうち、2年（2020年、21年）は想定外のパンデミックに当たり、渡航制限や博物館の閉鎖のために、カラーライドなど現物資料調査や研究交流も制限を受けた。このため、本研究並びに、同時期に1年間予定していたアメリカ国立ホロコースト記念博物館（以下、USHMM）のホロコースト応用研究マンデルセンターおよびイエール大学フォーチュンオフ・ホロコースト・ビデオ証言アーカイブとマクミラン国際地域研究所の客員研究員としての研究滞在を1年延長した。これにより、両機関の充実したデジタルアーカイブやワークショップやレクチャーの機会を利用して、資料調査や国際的ネットワーク作りを当初の想定以上に行うことができた。

(1) USHMMのオンライン・コレクション（館内ネットワークからは、一般公開のオンライン資料よりも10万点ほど多い資料にアクセスが可能）やアーカイブ資料を使って、カラー写真を始め、ホロコースト期の写真の調査を進めた。ホロコーストのカラー写真については、いまだ体系的な研究は出ておらず、個々のイメージの来歴など、証言資料も使いながら概観する基礎的作業を行った。ホロコーストのカラーイメージと記憶の問題は、国際的なホロコースト研究においても新しいテーマであり、最終年度にUSHMMの招聘により、同館のアウトリーチプログラムの一環として、アメリカ、カナダの3つの大学の学生に向けて、レクチャーを行い、反響を得た。今回はパンデミックのため、イスラエルやドイツの資料調査がかなわなかったため、また、ホロコースト写真自体が研究開始時の想定を超える膨大な量であったため、今後も研究を継続し、1、2年のうちに、もっともインパクトを期待できる英語の書籍として成果をまとめたい。

(2) メリーランド大学図書館プランゲ文庫所蔵の占領期日本のカラー写真、原爆跡地の写真、長崎原爆資料館所蔵の原爆関連写真の調査のほか、アメリカ議会図書館の資料を使って、冷戦期にアメリカで刊行された原爆関連資料や『LIFE』誌のナチ・ドイツや原爆をめぐる言説の調査も行った。

(3) ウーチ・ゲッターを撮影したヴァルター・ゲネヴァイン、ヒトラーの肖像写真家フーゴ・イエーガー、パービ・ヤールを撮影したヨハネス・ヘレの三人のカラーライドについては、USHMM、ドイツのハレ大学ポーランド研究センター、日本のシンポジウムやワークショップで、英語や日本語で口頭発表を行った。ワルシャワ・ゲッター、ウーチ・ゲッターの写真についても広範な調査を進め、それぞれ英語論文、日本語口頭発表としてまとめた。

(4) 調査の過程で、口述の証言者の語りは視覚的記憶が中心を占め、非視覚的嗅覚や音は周縁的であることがわかった。このため、軌道修正し、非視覚的記憶の記憶の調査対象の比重を、日記や手記など書かれたテキストに移すことにした。同様のテーマを進めるスイスの研究グループと研究上の意見交換を行い、方法論も含め、今後も連携して研究を進めていく。

(5) 日本におけるホロコーストの受容が、原爆や南京虐殺、従軍「慰安婦」問題など、日本の

関わる戦争の記憶と関連していることを、日本の戦中の対ナチ言説や戦後のホロコースト関連文学や映画の受容、冷戦期のポーランドのアウシュヴィッツ博物館と日本の反核市民運動との協力関係などから明らかにし、日本語論文にまとめた。日本におけるホロコーストの受容を戦後から今日までまとめたものとして、歴史研究においても評価されている。この論考も含め、これまで日本で未紹介だったポーランドの最新のホロコースト研究を紹介しつつ、日本における戦争の記憶の現状を論じる国際共著の論文集『ホロコーストとヒロシマ』を編纂、刊行した。1990年代以降、日本とポーランドのそれぞれにおいて、自国の歴史の美化をはかる歴史修正主義が、ユダヤ人を救った《諸国民のなかの正義の人》を軸に展開していることも浮かび上がる。こうした研究は、USHMMで2022年に行われた「ホロコーストとアジア」ワークショップでも英語で発表し、杉原千畝の日本における受容を中心に同様の調査研究を進める欧米やアジア拠点のアジア研究者にも研究ネットワークを広げた。

(6) ポーランド語では、1990年代以降の日本におけるホロコーストの受容について、ホロコースト専門査読誌『ユダヤ人虐殺』に寄稿した。日本におけるホロコーストの受容については、すでに先行する研究を同誌に寄稿しており、今回の論文はそれを補完するものになる。この二本はオンラインでも公開され、ポーランドにおいて、日本のホロコースト受容を紹介する先駆的なものとなった。

(7) ポーランドの戦前からの画家ミェチスワフ・ヴェイマンという、本国でも忘れられた画家がワルシャワ・ゲッター蜂起をテーマに作ったグラフィック連作『ダンサーズ』について、ワルシャワ・ユダヤ史研究所が2022年に開いた展覧会企画の一環として、招待講演を行った。本研究のワルシャワ・ゲッターの写真の調査に関連した成果である。

以上のように、本研究の成果は、ホロコースト研究およびポーランド研究の領域で、英語、日本語、ポーランド語で刊行・発表している。

(8) アメリカでの2年の在外研究により、これまでのポーランド研究ネットワークに加え、アメリカ拠点の英語系ホロコースト研究、ユダヤ研究、アジア研究にネットワークを広げることができたことも、本研究を通じた大きな成果である。ホロコーストの犠牲者でもあるポーランド語・イディッシュ語のバイリンガル詩人で作家デボラ・フォーゲルの拙訳の短編集『アカシアは花咲く』が日本翻訳大賞を受賞し（2020年）、アメリカやポーランドにおけるフォーゲル関連のイベントにも招待され、参加した。日本拠点のポーランド、ホロコースト研究者という独自の研究アイデンティティに加え、これまでポーランドやヨーロッパで培った研究ネットワークに積み重ねるかたちで、戦争の記憶の地域横断的比較研究に向けた国際的なネットワークを広げることができた。

(9) アメリカにおける研究活動の成果のひとつが、客員研究員として所属したイェール大学フオーチュンオフ・ホロコーストビデオ証言アーカイブのアジア初のアクセス拠点の開通である。同アーカイブは現在、アーカイブの利用を奨励するため、精力的に国際的なアクセス拠点を広げており、2022年に所属機関である名古屋外国語大学図書館に、アジア初、日本初の拠点が作られた。これまで、イェール大学のあるニューヘブンや欧米のホロコースト関連研究所のアクセス拠点に行かなければアクセスできなかった膨大な数の証言に、日本からアクセス可能になった意味は、日本のみならず、アジア拠点の研究者にとっても大きいはずだ。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 13件）

1. 著者名 Kato Ariko	4. 巻 66
2. 論文標題 Is Marceli Weron Bruno Schulz? The Newly Discovered Short Story "Undula"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Polish Review	6. 最初と最後の頁 106 ~ 114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5406/polishreview.66.4.0106	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Ariko Kato	4. 巻 2019/1-2 (324-325)
2. 論文標題 Znaczkzi, mapa i wladca. Postkolonialna wizja Brunona Schulza	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Konteksty	6. 最初と最後の頁 175-178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Ariko Kato	4. 巻 2019/1-2 (324-325)
2. 論文標題 Tlumaczenie "Akacje kwitna" Debory Vogel na jezyk japonski. Pokusy i trudnosci	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Konteksty	6. 最初と最後の頁 169-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 加藤 有子	4. 巻 22
2. 論文標題 第8回国際ブルーノ・シュルツ・フェスティバル ブルーノ・シュルツ受容の現在	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 スラヴ学論集	6. 最初と最後の頁 282-288
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤 有子	4. 巻 47
2. 論文標題 世界共通言語の探求 ポーランド未来派マニフェストと『パリを焼く』にみるブルーノ・ヤシェンスキの言語観	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ロシア・東欧研究	6. 最初と最後の頁 35～53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ariko Kato	4. 巻 14
2. 論文標題 Japonskie publikacje o Zagladzie wydane po 1995 r.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Zaglada Zydow. Studia i Materialy	6. 最初と最後の頁 632-647
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ariko Kato	4. 巻 1
2. 論文標題 Nieznana wersja Pale Paryz Brunona Jasienskiego	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Polonistyka na poczatku XXI wieku: Diagnozy, koncepcje, perspektywy. Tom 1. Literatura Polska i perspektywy nowej humanistyki. Ed. Jolanta Tanbor	6. 最初と最後の頁 452-465
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤有子	4. 巻 61
2. 論文標題 ポーランドにおけるホロコーストの記憶 ワルシャワ・ゲッター、学术界の現在	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アウシュヴィッツ平和博物館ニュースレター	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤有子	4. 巻 60
2. 論文標題 ポーランドにおけるホロコーストの記憶      ヘウムノとウーチの現在	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アウシュヴィッツ平和博物館ニュースレター	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤有子	4. 巻 59
2. 論文標題 ポーランドにおけるホロコーストの記憶      ポーランド・ユダヤ史博物館、第二次世界大戦博物館	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アウシュヴィッツ平和博物館ニュースレター	6. 最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤有子	4. 巻 58
2. 論文標題 ポーランドにおけるホロコーストの記憶	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アウシュヴィッツ平和博物館ニュースレター	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤有子	4. 巻 6月臨時増刊号
2. 論文標題 ウクライナ文化の危機の本質      侵攻の口実にされた「文化」と時代錯誤の植民地主義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 89 - 96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤有子 (翻訳)	4. 巻 6月臨時増刊号
2. 論文標題 【翻訳】ユーリイ・アンドルホヴィチ「ブチャの بعد」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 8-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kato Ariko	4. 巻 17-18
2. 論文標題 Obraz w obrazie i rama. Schulz wobec tradycji	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Schulz/Forum	6. 最初と最後の頁 49-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.26881/sf.2021.17-18.03	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤有子 (翻訳)	4. 巻 8
2. 論文標題 【翻訳】ステファン・ネレン「日本でホロコースト生存者の声を聞くこと、学ぶこと イェール大学 フォーチュンオフ・アーカイヴの東アジア初のアクセス拠点」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Artes Mundi	6. 最初と最後の頁 89-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 8件 / うち国際学会 13件)

1. 発表者名 Ariko Kato
2. 発表標題 Aesthetics and Orientalism in Color Photographs by Nazi Germans in Occupied Poland and Ukraine
3. 学会等名 Aleksander-Bruckner-Zentrum für Polenstudien & Professur für Osteuropäische Geschichte der MLU Halle-Wittenberg (Yvonne Kleinmann) Kolloquium im Wintersemester 2021/2022 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ariko Kato
2. 発表標題 The Myth of "Yellow Peril" in Interwar Polish Literature
3. 学会等名 EPICUR Universities Conference: Traveling Through Slavic Worlds (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ariko Kato, Anastasiya Lyubas, Natalya Lazar
2. 発表標題 Panel Discussion, Drop-in Translator Happy Hour: Polish Translators' Happy Hour: Blooming Spaces: "Blooming Spaces: Translating Debora Vogel, the Gertrude Stein of Interwar Poland"
3. 学会等名 43rd American Literary Translators Association (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ariko Kato
2. 発表標題 Zofia Nałkowska i Michiko Ishimure. Wokół literatury świadectwa
3. 学会等名 Uniwersytet Kazimierza Wielkiego w Bydgoszczy (Bydgoszcz, Poland) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ariko Kato
2. 発表標題 Dialekty i kobiety w powojennej literaturze japońskiej. Powieść Raj w morzu smutku Michiko Ishimure i inne
3. 学会等名 Festiwal "Poznan Poetow" (Poznan, Poland) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ariko Kato
2. 発表標題 "Akacje kwitna" Debory Vogel, czyli o doswiadczeniu przekladu na jezyk japonski pisarzy wielojezycznych
3. 学会等名 Uniwersytet Kazimierza Wielkiego w Bydgoszczy (Bydgoszcz, Poland) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤有子
2. 発表標題 デボラ・フォーゲル『アカシアは花咲く』をめぐって
3. 学会等名 シンポジウム「ポーランド文学の多様性」東京大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤有子
2. 発表標題 普遍言語の探求 両大戦間期ポーランド前衛文学の複数言語使用の作家たち ポーランド未来派ブルーノ・ヤシェンスキの「ヨーロッパ」と言語
3. 学会等名 ロシア東欧学会第47回研究大会、神戸大学 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤有子
2. 発表標題 1930年代ポーランドのユダヤ系前衛作家の共通言語 / 普遍言語の探求 デボラ・フォーゲルとブルーノ・シュルツ
3. 学会等名 シンポジウム「東欧文学の多言語的トポス：複数言語使用地域の創作をめぐる求心力と遠心力」東京大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ariko Kato
2. 発表標題 Mapa i znaczki: Czytanie Schulza polstkolonialne
3. 学会等名 Bruno Schulz; filozofia, poetyka i inne perspektywy miejsca (Drohobycz, Ukraine) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ariko Kato
2. 発表標題 Przygody z Debora Vogel: spotkanie z tłumaczami Ariko Kato i Jurkiem Prochaska
3. 学会等名 VIII International Bruno Schulz Festival (Ukraine) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤有子
2. 発表標題 趣旨説明 ヒロシマ・アウシュヴィッツ のレトリックを超えて
3. 学会等名 国際シンポジウム「ポーランドと日本における第二次世界大戦の記憶ホロコーストと原爆を起点とする比較的アプローチ」ウインクあいち (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤有子
2. 発表標題 ウッチ・ゲッターの写真とその後 ゲネヴァイン、ロス、グロスマン
3. 学会等名 シンポジウム「ウッチから考えるホロコースト 歴史・抵抗・表象」名古屋外国語大学 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ariko Kato
2. 発表標題 Hiroshima-(Nanjing)-Auschwitz: Perception of the Holocaust in Japan and Japan's Own Revisionism of War
3. 学会等名 Research Workshop: The Holocaust and Asia: Refugees, Memory, and Material Culture (The Jack, Joseph and Morton Mandel Center for Advanced Holocaust Studies at the US Holocaust Memorial Museum, Online) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ariko Kato
2. 発表標題 Mieczyslaw Wejman i reprezentacje Zaglady w literaturze i sztuce: Cykl Tarczacy w kontekście polskiej pamieci zbiorowej
3. 学会等名 Lecture Series: "Tarczacy 1944. Mieczyslaw Wejman" (Jewish Historical Institute in Warsaw, Online) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤有子
2. 発表標題 ホロコースト写真と表現をめぐる倫理的諸問題 パビ・ヤール、リヴィウ・ポグロム、《正義の人》 - - 写真の操作と歴史修正主義
3. 学会等名 加須屋明子科研公開国際ワークショップvol.4 (オンライン) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ariko Kato
2. 発表標題 How Do We Read Color Photography from the Holocaust and Other Historical Events?
3. 学会等名 United States Holocaust Memorial Museum Campus Outreach Lecture Program (United States Holocaust Memorial Museum, Online) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 加藤有子 ほか10名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 ホロコーストとヒロシマ	

1. 著者名 Ed. Anna Artwinska, Anja Tippner, Ariko Katoほか18名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 380
3. 書名 The Afterlife of the Shoah in Central and Eastern European Cultures: Concepts, Problems, and the Aesthetics of Postcatastrophic Narration	

1. 著者名 Ed. Tomasz Bilczewski, Stanley Bill, Magdalena Popiel, Ariko Kato ほか31名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 470
3. 書名 The Routledge World Companion to Polish Literature	

1. 著者名 Stanley Bill, Magdalena Popiel, Tomasz Bilczewski, Ariko Katoほか31名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Wydawnictwo Uniwersytetu Jagiellonskiego	5. 総ページ数 680
3. 書名 Swiatowa historia literatury polskiej. Interpretacje	

1. 著者名 Ariko Kato, Jacek Leociak ほか7名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Warsaw: Wydawnictwo IBL	5. 総ページ数 214
3. 書名 Pamięc o II wojnie światowej w Polsce i Japonii. Holokaust i Hiroszima w perspektywie porównawczej	

1. 著者名 Piotr Sliwinski, Ariko Kato ほか12名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Poznan: Wydawnictwo Wojewodzkiej Biblioteki Publicznej i Centrum Animacji Kultury	5. 総ページ数 200
3. 書名 Dyskursy, w dyskursach. Szkice o krytyce i literaturze lat ostatnich	

1. 著者名 デボラ・フォーゲル、加藤 有子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 220
3. 書名 アカシアは花咲く	

1. 著者名 Włodzimirz BOLECKI, Dieter DE BRUYN, Maria DELAPERRIERE, Peter ESTERHAZY, Aleksander FIUT, David GOLDFARB, Jerzy JARZEBSKI, Ariko KATO, Michał Paweł MARKOWSKI, Viera MENIÖK, Zaneta NALEWAJK, Joanna PAWELCZYK, Stanisław ROSIEK, Marc SAGNÖL, Jean-Pierre SALGAS, Małgorzata SMORAG-GOLDBERG ほか15人	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Paris: Editions L'improviste	5. 総ページ数 412
3. 書名 Bruno Schulz - entre modernisme & modernite	

1. 著者名 Wiera Meniok, Ariko Katolほか28名	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Drohobycz: Polonistyczne Centrum Naukowo-Informacyjne im. Igora Menioka Panstwowego Uniwersytetu Pedagogicznego im. Iwana Franki w Drohobyczu	5. 総ページ数 738
3. 書名 Bruno Schulz a wspolczesna teoria kulturowa. Materiały VII Miedzynarodowego Festiwalu Brunona Schulza w Drohobyczu	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	レオチャク ヤツェク  (Leociak Jacek)	Polish Academy of Sciences・Professor	
研究協力者	クラインマン イヴォンヌ  (Kleinmann Yvonne)	Martin Luther University Halle-Wittenberg・Professor	
研究協力者	リブソン ピョートル  (Rypson Piotr)	Jewish Historical Institute in Warsaw・Curator	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	アメリカホロコースト記念博物館	イェール大学		
ポーランド	ポーランド科学アカデミー文学研究所	ポーランド科学アカデミー哲学社会学研究所	アダム・ミツキェヴィチ大学 (ポズナニ)	